ハコイッ！！

白蜜印のメイド漬け

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハコイッ！！

【Ｎコード】
Ｎ２４７１Ｖ

【作者名】
白蜜印のメイド漬け

【あらすじ】
部活勧誘の時に聞いた美声の主を探し求め、大の声フェチである佐藤竜二が辿り着いたのは、人見知り集団「箱部」だった。
美声の主を見つける為にだった目的は、やがて、恋へと変わる。

1＊箱の中からこんにちは

「入部してください」
と、どこからか、声が聞こえた。
澄んだ美しい声だった。
部活勧誘で賑わう校舎前広場。佐藤竜二は、その美声の持ち主を一目見たくて、人だかりの中を探していた。
耳に意識を集中させて、小動物の声さえ取りこぼさんとばかりに、静かに、息を静めた。
聞こえなかった。
声を使いそうな部活――放送部や軽音楽部など。そこらへんに集中してみたが、やはり違う。
幻聴だったのかもしれない、、とは思えなかった。
その絶対的な自信は、詰まるところ、ここからくるのだ。
佐藤竜二が声フェチであることから。

＊

「川上先輩？」
喜孝とは中学時代からの付き合いだ。
通常教室の、窓際の席に机を合わせて昼食を取る、佐藤竜二とその友人の加藤喜孝。
売店で買った惣菜パンを二つと自販機のジュースを一本、それぞれ購入したのが、本日の昼食のメニューだ。
背割りパンを頬張りながら、喜孝は言う。
「川上澪。声フェチのお前が知らないなんて、よほどだな」
何がよほどなのかは知らないが、とにもかくにも竜二に希望の兆しが見えた。

竜二は昼食に手を付けぬまま、席を立って、
「行ってくる」
とだけ言って、教室を出ようとした。
が、そこに待ったの声が。というより、忠告が入った。
「川上先輩は教室にはいないぞ」
竜二の勇ましい歩みが止まる。
今は昼時。なるほど。どこか別の場所で食事を取っているわけか。
「どこにいる？」
「まあ、会えないと思うけど――」

＊

三階に上がって、突き当たり右の、一番奥の部屋。
に、川上澪はいるらしい。
実際に言われた場所まで来た竜二だが、勝手に入っていいのだろうか。
そこは、物置部屋。
授業で使う器材やその他諸々が保管されている場所だ。
先生に頼まれたりでもしない限り、入室は禁止。
そもそも、普段は鍵が掛かっているはずだ。
実のところ、声だけが聞ければ満足なので、中に入る必要はないのだが。
竜二はブレザーの右ポケットから、スティック状のある物を取り出した。
「くっ……妥協すべきか？」
高性能ボイスレコーダー。最大三十分の音が録音可能。ブロックノイズ機能付き。お値段１９８００円なり。
「いや、機械の性能に頼るな。佐藤竜二。声は命。生で録音してこそ、生きた声が録れるのだ」
決心がついた。竜二は意を決し、未知なる領域への扉に手を掛け

た。
行くぞ！　という心の叫びと共に、その扉を開けた。
「――――」
扉を開けた先、そこには、驚愕の光景とはかけ離れた。いや、別の意味で驚愕の光景が広がっていた。
「人が……いない」
そこは、正真正銘の物置部屋。
そこに嘘偽りはなく、ただ、れ以上もそれ以下でもない。
紛うこと無き、物置部屋だった。
雑貨で乱れた部屋。窮屈に感じるのはそれのせいで、かび臭いのは気のせいじゃない。
こんな真っ昼間なのに、カーテンで日差しをシャットアウト。
よほど肌を気にしているか、あるいはそもそも誰も使っていないか。
この部屋の悪臭。仮に人が使っているなら、多少なりと換気はするはずだ。
それがされていないことは、つまり――
「……デマか」
「どちら様ですか～？」
と、どこからか、間抜けなハスキーボイスが聞こえた。はっきりとだ。
しかも、かなり近かった。
竜二は辺りを見渡した。
すると、一点、実のところ入った時から変だとは思っていたのだが――
「まさか……」
中心のデスクに目がいった。
厳密には、そこにある、いや、場合によっては座るとなるのだが。
みかん箱を被った何か。

それが、三体。もしくは、三人。
人ではないと思うのだが、どうしたものか、この学校の制服を着ているのだ。
三人全員が女子仕様のストライプのネクタイをしている。
「私様（わたくしさま）に構わず、荷物は勝手に持っていくといい」
やたら演技がかった、それもかなり素人臭い、どこかのお偉いお嬢様を意識したような声だった。
「オラクルが聞こえる。それは、持っていってよいものだと」
今度は、悪徳宗教の総帥みたいな声だった。
人、のようだ。
が、だとすれば、何故、ダンボールを頭に！？
色々とツッコミたい心境だったが、それ以上に、一つ、気になることがあった。
（全員……違う）
聞いた声の中に、あの時の声がいなかった。
初対面の緊張を隠しながら、竜二は質問をぶつけてみた。
「あの、川上先輩っていませんか？」
すると、間抜けなハスキーボイスの彼女が、
「部長なら……」
と、言って、右斜め後ろを向いた。
ガタン！　と、揺れたのは、掃除の道具箱だった。
なるほど。この中にいるわけか。
竜二は道具箱の前に立ち、念の為、本人かどうかを訊いてみた。
「川上、先輩ですか？」
すると、中から声が。
「君、誰？　道具箱に声なんか掛けて頭おかしいんじゃないの？」
痛烈な言葉の嵐が飛んできた。しかし、美声だった。
それは、自然と清楚な出で立ちまでが思い浮かぶほどの、美しい声だった。

間違いない。竜二は確信した。
こうなった竜二は、もう誰も止められない。
ガシッ、と、両サイドから道具箱を押さえつけた竜二。
「！！」
ガタガタ、と、道具箱を揺らし、声をせがんだ。
「お願いします！　今の声をもう一度！　もう一度だけお願いします！」
傍らで見守る彼女達は同時にこう思う。
マゾが来た……！
「ちょ！　何なの！　君！？　誰か！　誰かこの変態をどうにかして！」
どっちもどっちだ。
「今の！　くっ！　道具箱がうるさくて駄目だ！」
お前がやっていることだろうに。
「すいません！　最後にもう一度だけ……！」
と、言った時だ。
決して開けてはならない、禁断の扉が開いてしまった。
不慮の事故、と言えば、それまでのこと。
ただ、それは、確かな運命でもあった。
一方にとって、それは終わりであり、もう一方にとって、それは始まりであった。
が、しかし――
「……」
両方が始まりでもあった。
「……」
見つめ合う二人。
中から出てきたのは、それはそれは美しい。
黒くて長い髪をした、大和撫子だった。

1＊箱の中からこんにちは（後書き）

そんなわけで『ハコイッ！！』が始まりました。白蜜印のメイド漬けです。

この作品は、人見知り集団『箱部』を舞台にしたラブコメディです。

ちょっぴり残念な子たちが出てきますが、気軽に笑ってやってください。

バトルとかまったくないまったりとしたお話なんですが、末永くよろしくお願いします！

2＊ノットフラッシュガールズ

川上澪が転落した。
が、転落というほど大袈裟なことでもない。
掃除の道具箱から転げ落ちただけ。
ただそれだけのこと。
崖から転落したわけでもないから、時間も一瞬に近い。
しかし、その一瞬に近い時間の中で、竜二の網膜に、それほどまでに川上澪という一人の女性の姿が、焼き付けられたのもまた事実。
女性の理想を尽く叶えたようなスタイル。
雨粒のように垂れたウェーブ状の黒髪。
髪は長く、腰辺りまで伸びていて。
肌の色は白く、愛玩動物のように可愛いらしくぱっちりと開いた瞳は一切の澱みがなくて。
「いった〜い……」
尻餅するその姿さえ、絵になるほどの美しさだった。
度数高めのウォッカを一気に流し込んだような、一瞬の熱を、竜二は胸の奥で感じた。
初めての感覚に言葉も出ず、それから解放されたのは、胸の奥の熱が引いた頃だった。
熱が引いた今も、心臓は高鳴る。
それは、獣から逃げ切った時の高鳴りとは、また少し、違う気がした。
「大丈夫ですか！？　部長！」
間抜けなハスキーボイスの彼女が、部長と慕う澪の元に歩み寄ると、同じくして他の二人も歩み寄ってきた。
澪は未だ尻餅をついたままで、まさか目の前で人に、それも男に見られていることも知らずに、変に捲れ上がったスカートに気付いていなかった。

当然、その隙間から下着が見えていることも。
「部長！　パンツパンツ！」
との指摘を受け、ようやく気付いたのが関の山。
見知らぬ男――たぶん、後輩だろう――に、がっつりと下着を見られていた。
ついでに気付いたのが、人に見られたということだ。
下着、ではなく――

自分のことが。

「……あっ、いや！」
竜二は別に下着に見とれていたわけではない。もちろん興味がないわけでもない。そこは健全な高校生。ないと言えば嘘になる。
竜二が見とれていたのは、澪という一人の女性だった。
しかし、それは一方的な見方に過ぎず、相手側からすれば、それは、下着をガン見するただの変態にしか映っていない。
ついさっきの欲しがる発言も相俟って、現場は完全に変態に出くわした空気になっていた。
「見られた～！」
涙声で澪が向かった先は、部員の胸――ではなく、あの道具箱の中だった。
バタン！　と、強めに扉を閉めると、中でずっと『見られた』『見られた』と泣き叫んでいた。
完全に悪者とされた竜二は、とにもかくにも謝ることに徹するほかなかった。
「すいません！　本当に見る気はなかったんです！」
あれだけ見といてよく言うよ、と、竜二以外の誰しもが思ったことだろう。
「見とれてたじゃない！」
確かにそうだ。

「違います！　あれは……」
ふと、言葉に詰まった。
あれは、なんだ？
俺は、何に見とれていたんだ？
「やっぱり見てたんだ！　――私の顔！」
えっ、という空気が流れた。
その後も澪は何か熱く語っていたが、竜二はおろか部員達までもが、一切入ってこなかったという。
そんな場の空気をどことなく察した澪が、やがて周囲との相違に気が付く。
「み、みんな……？」
が、それが何かまではわからないようだ。

＊

「箱部？」
何だ、その部活は？　というのが、竜二がそれに持つ最初の印象だった。
たぶん、何らかの行事に使ったものだろう。雑貨類の中に紛れ込んでいた埃被ったパイプ椅子を、竜二は引っ張り出し、三人の部員が固まる机の近くに、適当に置いて座った。
ここからは部員全員が眺められる。が、頭にダンボールを被って、あまり見分けがつけにくい。
「……」
掃除の道具箱を見る。一人に限っては、姿すら見せてないし。
「知らない？　頑張って部活勧誘してたんだけどなあ」
間抜けなハスキーボイスの彼女が言う。ダンボールの下から金髪の毛先が見える。更に下を行けば、たゆんたゆんの胸が見えるわけで。
顔が見えない分、竜二は目のやり場に困っていた。

不自然に目を逸らしたまま、皆目見当つかない箱部の活動内容を訊いてみた。
「ところで、この箱部って、何をしている場所なんですか？」
訊かれた途端、部員達がそわそわし出した。
明らかに返答に困っているのが見え見えで、なるほど。答えられないほど何もしていない部活なわけか。
心中で納得する竜二。不意に、壁の張り紙に目が行く。
「今月の目標……？」
もはや、そわそわすらしなくなった。
竜二はそれを見て、更にこの奇天烈珍妙な格好をした部員達を見て、箱部の全容を理解した。
「本当に、よほどだな」
喜孝の言っていた意味がわかった。

・人と五秒以上、目を合わす。

つまり。
箱部とは、人見知りを克服する為の集まりなのだと。

3＊途端、無言。

こんな表記の仕方、未だかつてないだろうが、そのまま使わせてもらおう。

ダンボールを脱いだ。

部員全員が。四名の女子高生が。

竜二は彼女達を正面に座らせ、反対側に一人、壮観できるその位置に座った。

左から順に。

グレーの猫みたいな髪色。たぶん、地毛。瞳の色が日本人のそれとは違う。かと言って、カラーコンタクトの出す色でもない。

「名前は？」

と、竜二がその彼女に訊いてみたのだが、何も言ってくれなかった。

さっきまで、流暢にオラクルがどうとか言ってたとは思えないくらいだ。

粘っても無駄だろう、と、思い、竜二は右隣の彼女に話すことにした。

赤より少し落ち着いた色の髪色。髪型に大きな特徴はなく、全体的に見ても特徴はない。

強いて言えば、今もそうだが、頬杖して歪んだ口元から、犬歯が見えている。この犬歯、噛まれたら血を吸われそうだ。

こんなところで、後は、胸が小さいことくらいだ。

それも、他の部員達が平均値より少し上なくらいで、彼女が特段小さいわけではない。

「名前は？」

思ってた通りの、無視。

更に右隣に目を移す。

「私は新谷里穂子！　で、隣が白兎凛ちゃん！　で、更にその隣に

いるのが、スメラギ＝フェイトちゃん！」
思ってた反応とは違った。
唖然とする竜二。頭の中で、この箱部の活動内容、及び、その部員達の入部動機を思い出す。
……合わない。
「新谷先輩は、人見知りじゃないんですか？」
「私は澪に誘われて入っただけだよ？」
「それなら、ダンボールを被る必要はないんじゃ？」
「だって、面白いじゃん。ハロウィンみたいで」
里穂子は笑いながら言う。
「面白くはないと思いますが……」
で、この部長ありか。
里穂子が箱部を熱く語っている中、竜二は澪を見た。
澪だけは、あれから一回も目を合わせてくれない。
（まあ、装備品が違うからな……）
片やダンボール。片や掃除の道具箱。守りが違い過ぎる。
その違いが、そのまま彼女の人見知り度合いを表すようなものだ。
しかし、いつみても美人だな。竜二は改めて感じた。
目を合わせてくれないと嘆いたが、目が合ったら合ったで、まともに見れそうにない。
同じ先輩でも、里穂子は見れても、澪は見れない。
そこに、可愛いからとかそういう差別的な意味合いはなくて。
「あー、そろそろお昼終わりだね」
里穂子が手元のケータイを見て気付く。ピンクと洒落た色のケータイを使っている割には、ストラップがおでんの具材という、独自のセンスを発揮している。
竜二が引き気味にそれを見ていると、正面でガサガサと物音が聞こえた。
「早く教室に戻らないと」
見ると、全員がダンボールではなく紙袋を装備していた。

目の辺りにある僅かな切れ目が、せめてもの抵抗か。
「それで戻る気ですか！？」
声色々に。
「当然」
と、返ってきた。
余計に人に見られるのでは、と、疑問に感じる竜二をよそに、部員達は皆、列車を作って部室を後にしていた。
取り残された竜二は、ふと思った。
「あ、何か被ってれば、話せるんだ」

4＊里穂子アフタースクール

やや遅れて、竜二が教室に戻ろうとしていると、その途中、白兎凛の姿を見つけた。
二階に下りたところだ。
ここからなら、三年である凛は左へ曲がるはずだ。
竜二は一年なので、右へ曲がることになる。
凛の背中を見ながら、悠々と階段を下りていく竜二。
「……ん？」
気付くと、凛が右へ曲がっていた。
そこで考え改める。別に三年の先輩と仲が良いだけで、一度たりとも凛が三年だとは聞いていない。
（となると、二年か）
竜二のクラスにはいない。確か隣のクラスにもいなかったはず。白兎なんて珍しい名字なら記憶に残りやすいし。
自然とそう位置付けた竜二は、生徒の数も疎らなその廊下を、特に考えることもなく進んでいった。
徐々に、刻々と、自分のクラスに近付くにつれて、違和感が現実味を帯びていく。
そして、それは現実となった。
ガラガラ――と、凛が扉を開けて教室に入っていった。
竜二のクラスに、一年の教室に。
「えーと……、つまり……、これはなんだ？」
白兎凛は、俺と同級生？
改めて思い返す。白兎凛はクラスにいなかったはずだ。それは間違いのない事実。
しかし、目の前で、その事実を否定する出来事が起こっている。
竜二の頭の中は混乱していた。有り得ないと思うことを無理に理解しようとして、熱を帯びる。頭痛までしてきた。

しかし、そんな中で、ふと、気付いたことがある。
教室を見ていると、どうも誰も凛に気付いていないっぽいのだ。
紙一重で無視されているように見えない。
まるで、さもそこに誰もいないかのように。
「どうなってるんだ？」
いるのにいない。その矛盾が解決されたのは、放課後のことだった。

＊

「ＹＯ！　元気してるかい！？　後輩クン！」
一日の全行程を終えたばかりの、最も疲れた時間に、里穂子がノリのいいラッパー口調で教室に乗り込んできた。
春の陽気を窺わせない、冬物のコートと男臭い軍手をはめていた。
まさに帰る瞬間だった竜二は、スクールバッグを背負った状態のまま、立っていた。
「テンション高いですね。白兎なら後ろにいますよ」
「よっしゃー！　お二人様、特盛りご案内だあ～！」
意味不明な言葉と共に、里穂子は竜二の肩を掴み、そのまま凛のいる後ろまで引っ張っていき、
「！！」
差し伸べた手を凛にさらりと躱され、単独で部室に行かれてしまった。
「おっと！　食い逃げだ！」
竜二は里穂子の手から逃れた。
「ちょっ、何なんですか！　急に！」
「よくぞ聞いてくれた！　ワトソン君！！」
「佐藤ですけど」
「私は部員を部室に連行する宿命を背負っているのだよ」
たぶん、何かの探偵物の真似なのだろう。それっぽい言い回しで

里穂子は言っていた。
「俺、部員じゃないんですが……」
と、正論を述べた竜二の目の前に、ある物が晒された。
見覚えのある、細長い銀のフォルム。
無意識に上下あらゆるポケットの中を探り、やがて、それは意識した行動へと変わる。
ない。
ボイスレコーダーが。
それが自分の物だと確信したのは、里穂子の殊勝な笑み。
「ふふふ、一緒に署まで来てもらおうか」
竜二に、逃げる選択肢はなかった。

5＊放課後の“D”

尋問される側とする側
つい数時間前と逆の展開が、箱部の部室で起きていた。
一対四の構図。竜二の正面には、箱部の部員達がいた。
偶然にも、昼休みの時と座る位置が同じという。
対する両者の間には、一台のボイスレコーダーが置かれてある。
それ以外は何も置かれてなく、物的証拠が一人的を浴びていた。
確保された身の竜二は、まともに正面を見れない。
女性達が送る視線の色も様々。
スメラギは無反応無関心で、凛はドン引きで、里穂子は刑事物と思わしき真似をしてて、澪に限ってはダンボール装備で何もわからない。
結果、まともな反応をしていたのは、凛だけだった。
「さて、佐藤クン。君の言い分から聞こうか」
竜二は少し視線を上げて。
凛と目が合う。酷い目だ。ゴミでも見るような目を向けている。
心が痛い。やっぱり視線は下げた。
「別に、俺は声を録りたかっただけで、やましいことは何も考えてないですよ」
「声なんか録って、どうするつもりだったんだい？」
「どうって……」
そんなもの決まってるじゃないないか、と、言わんばかりの声で竜二は一言。
「聴いて楽しむんですよ」
ラッシュを叩き込む。
「声を聴いて、その人の心や背景を感じて、世界に入り込む」
そして、トドメの一撃。
「――声は、自分の本当の姿を映すんです」

1ラウンドTKO勝ち。白いタオルを放られると同時に、カンカンカン――女性達の脳内でゴングが鳴り響く。
戦意喪失。立ち上がることすらできない。
「……真っ当な理由を期待した私がバカだったわ」
呆れる凛。頭痛薬をくれと顔が言っている。
「いやいや、別に汚らわしいことしてるわけじゃないし」
「邪気を感じます」
スメラギが乗り出す。
更には、澪までもが。
「盗聴を正当化してる……」
まあ、正論だ。
三人の部員達の意見をまとめた結果、里穂子は一つの結論に至る。
「つまり、佐藤クンは犯人である以上に変態なんだね！」
「犯人でもないし変態でもありません」
犯人でも変態でもある。
と、ここで里穂子が態度を急変してきた。
「だけど、わかるよ。里穂子オネーサンはオトナだからね」
「……？　どうしたんですか。急に」
「ほれ、お食べ。カツ丼だ」
ちょん、と、手前に差し出されたのは、飴だった。
「……飴ですね」
「価値観の違いってやつさ。それだけで一方的に追求するのはよくないからね」
里穂子はマイペースに話を進めて……
パン！
と、手を叩いた。
「――よし！　ここは、佐藤クンが箱部に入部することで手を打と

う！」
竜二は悟る。
散々、人をけなしていながら、結局――
「それが目的か」
人員確保が狙いだったのだ。

6＊低血圧低次元

両者の間に微妙な沈黙が流れ、不意に竜二は立ち上がり、机上のあるそれを手に取ろうとした。
が、そこをすかさず里穂子が奪取。命綱とも言うべきボイスレコーダーだけは死守した。
「ちょっ、何なんですか」
ややキレ気味に竜二は口にし、前乗りになって、里穂子からボイスレコーダーを取り返そうとする。
前乗りになった瞬間、里穂子の両隣に座る二人が、ひいいいい、と、大怪獣バトルに遭遇したみたいに怯えていた。
そんな二人を放って格闘する竜二と里穂子の二人。なかなかの組み合いの末、里穂子がボイスレコーダーを、何を考えてるのか、そもそも何も考えてないだろうが――
御自慢の胸に挟み込んだ。
正確には、谷間。しかも、かなり深く埋まっている。
組み合いの流れで、そのまま掴み取りそうになった竜二だったが、寸前で止まる。
そこから放たれる神聖なオーラの前に為す術を無くす。
「卑怯だ……！」
里穂子は殊勝な笑みを浮かべながら、
「ふふふ、卑怯とは聞き捨てならないね。そもそもの発端は、佐藤クン。キミがこんな物を持ってくるのがいけないのだよ」
「こんな物って」
「――ここでマジックカード『校則』を発動！　更にリバースカード『生徒会への報告』で必勝コンボだぜ！」
「確かに校則では持ち込み禁止ですし、生徒会に報告されたらまずいんでしょうけど――むしろ、まずいのはそちらですよね」
ビクッ、と、同時に肩を震わす女性達。

「四人」
ビクビクッ、と、またも同時に肩を震わす女性達。
「確か、部活を作るには、最低五人の部員が必要だったはず」
スーッ、と、里穂子の胸の谷間から、奪取したボイスレコーダーが浮かび上がってきた。
「――足りないですよね。人数」
ポロッ、と、ついにボイスレコーダーが落っこちてしまった。
机上に落ちたそれを、焦らず回収する竜二。
……ぬくい。
「他に部員がいる感じはなさそうだし、たぶん、もう既に生徒会に目を付けられてて――何とか誤魔化し誤魔化し切り抜けてきて、それで――」
瞬間。

土下座。

それは見事なまでの土下座だった。
そして、同級生以外にも先輩が、それも二年上の先輩がいるという現実、リアリティに、竜二は悼まれなくなり、攻撃を止めた。
「頭を上げてください」
お許しというか、情けを頂き、女性達が頭を上げた。
救いを乞うような眼差しで、竜二を、見つめている。
竜二も竜二で、別に相手が間違ったことを言っているわけじゃないし、むしろ、正論を述べられているので、悪いのはこちらだと思っていた。
「どうぞ、俺でよければ入りますよ」
ただし――と、言った時だ。
「イエーイ！　今月の目標クリアだぜ！」
里穂子がはしゃぐ。その背後にある張り紙を見て、竜二は呆れていた。

「それだったら、一昨日の昼休みに達成してたよ」
「違いますよ、澪先輩。一週間前にはもう……」
「部活勧誘の時に――」
人と五秒以上、目を合わす。
確かに部員も人だ。人なのだが――
「……せめて、部員は外しましょうよ」
もうそれ、半分箱だろ。

7＊歌って踊って脱ぎます？

午前七時。
朝食終わりの佐藤竜二が向かったのは、姉の部屋。
階段を上がって、二階へ。
奥の部屋が姉の部屋だ。
姉は工場現場で働いている。だらしない性格に似合わず、弟の学費の為にせっせと働いている。
竜二が出来ることと言えば、部屋の掃除や身の回りの世話くらい。
姉を起こすのは、日課だ。
部屋の手前を見る。ない。
「アネキ、雑誌はまとめて廊下に出しとけって言ってるだろ」
本日は水曜日。古新聞や雑誌を出す日だ。
トイレットペーパーやポケットティッシュなどの日用品と交換できるので、佐藤家は非常に助かっている。
「うぅ……今日の朝は？」
竜二は中に入った。
ぶわっとした生温い空気が充満する部屋には、所狭しと物が散らばっていた。
主に布団の周りに散らばっていて、現代人の欠点を根こそぎ詰め込んだような状態だった。
薄いピンクのキャミソールとパンツのみの、極めて裸に近い格好の姉が、むくりと起き上がった。
ボサボサの金髪を掻いた手で、目をこする。
酷い顔だ。化粧を落とさなかったツケが倍になって返ってきている。
姉の、佐藤愛子だ。
竜二はせっせと雑誌を回収して、ついでに放置してあった衣類も回収した。

「今日は和食。ハチミツ梅は冷蔵庫に入れておいたから」
「ふぁーい」
愛子は睡魔と格闘しながらも、返事をした。
愛子の二度寝しないかを脇目で監視しながら、竜二は一階に下りていった。
居間に向かう途中、洗面所に立ち寄って、併設されてある洗濯機に洗い物をぶち込んだ。
その後、居間に向かう。
食器棚に向かい、そこにある荷紐で雑誌の束をくくった。
「まったく、こんなに溜めて」
とか言いつつも、その顔はにやけている。嬉しいのだ。
しかし、にやけ顔で雑誌をくくっていると、突如、その顔に怪しい雲行きが見られた。
最初ははっきりとしなかったものが、はっきりと、目に見えるようになる。
その視線の先にあるのは、愛子が持ってた雑誌。
竜二の表情が変わったのは、その見出しを見てからだ。
「川上……澪？」
その名前が、立ち写真と共に飾られていたのだ。
そこには、確かに、竜二の知る澪がいて。
澪は箱部の部長で、人見知りで――
「ど、どういうことだ」
アイドルとは正反対の立ち位置にいるはずなのに。
「――なんで、澪先輩がアイドルなんかやってるんだ？」

8＊バックアップキャンセラー

まだ冬の寒さを引きずった四月半ばの通学路を、竜二は歩いていた。
周りには沢山の学生達がいて、その格好も様々だ。
まもなく校門に差し掛かろうとした頃、校舎手前の十字路の右の下り坂、冬の寒さを引きずり過ぎた里穂子が駆け足で下りてきた。
朝方の住宅街に、ドタドタという足音がよく響く。
ぶつかるかぶつからないかの手前で、里穂子は止まった。
偶然にも時間が重なった竜二と合流して、訳も分からず背中を叩いていた。
竜二は、くたびれた猫みたいな背中をしながら歩く。
「ヘイヘイ！　若者！　元気ないね！」
軽快な挨拶で里穂子が近寄る。
そのまま自然の流れで、二人は校舎まで共にすることに。
学生達の流れに巻き込まれながら、話を続ける。
「今日は一段と寒いですね」
「佐藤クンは随分と装甲が薄いね。そんなんじゃ、一発でやられちゃうよ」
「先輩が厚すぎなんです。周りから見ても、かなり浮いてますよ」
「私は特別だからね」
相変わらずおかしなことを言う人だ、と、竜二は思う。
と、ここで、今朝方の出来事を思い出す。
バッグから取っておいた雑誌を取り出し、里穂子に見せた。
「そういえば、これ」
里穂子は雑誌に目を向ける。
「おっ、懐かしいもの持ってるね」
「あっ、じゃあ、やっぱり」
「おうよ、澪だぜ」

「何で……というか、懐かしいって？」
「澪がアイドルやってたのは、高校入る前までだからね。知らないの？　ほら」
そう言って、里穂子が指差した場所には、２００８年５月と表記されていた。
三年前の雑誌を放置してるなんて……。実の姉の怠慢さに呆れるを超えて、賞賛を贈りたい。
「はあ……というより、人見知りでアイドルなんて出来るもんなんですか？」
「いやいや、アイドルやってた頃の澪は、人見知りじゃないよ」
「えっ、そうなんですか？」
じゃあ、いつからあんなに……、と、言おうとした時だ。
里穂子が竜二から雑誌を奪った。
そして、忠告する。
「この話は終わり！」
「終わりって」
「またこの話をしたら、その時はおしおきが待ってるぜ！」
ふははは、と、豪快に高笑いをあげながら、里穂子は竜二の先を行った。
「何がどうなってるんだ？」

9＊アイドルはユーレイ系？

「へぇ、あの川上先輩がねえ……」
澪がアイドルだったことを喜孝に告げると、御覧の反応が返ってきた。
竜二は、意外に思う。
喜孝は高校に入ってまだ十日も経ってないのに、校内美女ランキングなるものを完成させていて。
要するに、女好きなのだ。
その範囲は学生だけにあらず、アイドルやモデルにまで網羅されてある。
その喜孝でさえ知らなかったのだから、澪は、アイドルとして売れてなかったのだろう。
竜二は勝手に、やめた理由も売れなかったからだと、それがトラウマで人見知りにもなったのだと、そう思っていた。
「けど、意外だなあ。結構、小さい雑誌も目通してるつもりなのに」
どんな雑誌？　と、訊かれたが、
「忘れた」
里穂子が持ったままなので、答えられなかった。
授業開始を告げる鐘がなると、竜二は自分の席に戻った。
まさかとは思う。
実は、昨日の放課後。
夕焼けに照る廊下で、竜二は凛と、こんな話をしていた。
「白兎って、同じクラスだったんだな」
そこには水くさいなどという意味合いはなく、単に、竜二は凛が同じ教室にいたことに驚いているのだ。
話はせずとも、クラスに誰がいるくらいはわかるはず。
なのに、ということだ。
凛は、後ろを振り向かず、鞄で顔を隠しながら、言う。

「これで、気付いたのは、アンタと……喜孝ってやつの二人だけね」
さすが喜孝だ。
「気付いたって……もう入学して二週間近く経つのにか？」
すると、凛の口からとんでもない言葉が飛び出てきた。
「消してるのよ」
理解が追いつかず、竜二は、一瞬、戸惑う。
「け、消してる？」
そう。と、はっきりと凛は答えた。
「さすがにクラスで箱を被るわけにはいかないでしょ」
「まあ、そうだな」
「だから、あえて存在力のあるやつの後ろにいるの。早い話、意識を別に移してるわけ」
「なるほど、それで、消してるか」
――などという会話をしていた。
今も確かに凛の周りには、クラスの盛り立て役がいる。
でも、最初から凛だけに意識を集中すれば、問題ない。
今の竜二には、はっきりと凛が見えている。

１０＊キサラギ＝フェイトは鳴かない

謎は未解決のまま、更に深まる形となった
深まる謎を引きずったまま、放課後に。
竜二は、部室に一人、足を運んだ。形とは言え、一応は箱部に入ってたことになってるので、部室に出入りするくらいの権限はあるだろう。
そうして部室に足を運んだ竜二。三階の奥の部屋。扉に手を掛けて、開ける。
「失礼します」
ご丁寧に挨拶までして、部屋に入ったはいいが……
「……誰も来てない」
最初の数十秒くらいは、そう思った。
しかし、ふと、椅子の下に目を向けると、そこには、あるはずのないバッグがあった。
一時的に部屋を空けているのか。先生に呼び出されたとか、トイレに行ってるとかで。
まあ、そう考えるのが、ある種の常識なのだろう。
――が、その考えは、ここでは非常識でしかない。
竜二は、脇目も振らず真っ先に、掃除の道具箱に向かった。
急に掃除がしたくなったのではなく、しかし、扉を開けてやった。
人だ。しかも、女。
長い黒髪を垂らして、三角座りをして。
捕食間際の小動物みたいな面で、こちらを見ている。
凄く、可愛い。
角度的に、ここからだと、彼女のパンツが見える。
見た目通りかどうかは知らないが、夏の空を彷彿とさせる清楚な色合いだった。
竜二は、セオリーとして、そこから目線を外した。

「部室の中の時くらい、顔を出しましょうよ」
箱部は、極度の人見知り集団が更正をする為の部活である。
彼女、川上澪は箱部の部長。規格外の人見知りだ。
「な、なんで、佐藤君が来てるの？」
「いや、先輩達に土下座までさせて来ない人はいませんよ」
困った人だ、と、澪は思う。
「そこ、どいてくれないと、出れないよ」
「えっ、あ、すいません」
竜二が一歩下がった瞬間、

――バタンッ！！

澪が扉を閉めた。
「ええっ！？　ちょっ、開けたばかりじゃないですか！」
「開けてなんて頼んでないよ！　誰かー！　早く来てー！」
それから数十分後に、フェイトがきたのだが、彼女が澪を助けることはなかった。

11＊逃げれない包囲網

澪が掃除の道具箱に閉じこもってしまったので、竜二は強行手段には出ずに、来たばかりのフェイトに話を聞くことにした。
フェイトは、頭に紙服を被り、読書に勤しんでいた。
竜二は彼女の正面に座り、とりあえず別の話題から入ってみる。
「それ、物凄く見づらくないですか？」
話題というより、気になることだ。
「見づらくない」
会話が続かない。無理に広げても苦しいだけだ。
が、この空気も苦しい。
引き返すべきか、と、考え出したちょうどその頃、ガラガラ――と、部室の扉が開いた。
開いたその先には、凛がいた。
何気なく入ってすぐ、部屋の中心に異物を見るような目を向ける。
「……何で、あんたがいるの？」
凄い言いがかりだ。
「やめてもいいんだぞ」
「――退部はお断りだぜ～！」
聞き慣れた声、オーバーリアクション。
里穂子だ。
里穂子が白兎の両肩を飛び箱のように押さえ、頭から飛び出ていた。
既に飛ばなくても見えているのに、何をしたいのか。
倒れかけた白兎をよそに、里穂子ははっきりと断言する。
「入部届を受理した時点で、君はもう逃げれないのだよ」
キシャー、と、あくどい猫みたいな幻が、里穂子の背後に見える。
竜二はさながら小鳥。捕食の対象だ。
「卑怯だ！」

訴えてやると言わんばかりに立ち上がり、里穂子を指差す竜二。
「卑怯とは聞き捨てならないね」
白兎がこそこそと避難してくる。
「むしろ卑怯なのは、君じゃないかい？　佐藤クン」
「何のことですか？」
「もう忘れたのかい？」
と、言って、里穂子は自らのバッグを漁り出した。
本当にわからなかった竜二。しかし、里穂子がバッグを漁り出して気付く。そうだ。朝のことだ。
「先輩！　ここでは……！」
「これだよー！！」
勢いよく、里穂子はバッグからそれを抜き出した。
澪が載ったアイドル雑誌。
秘密にするはずだった雑誌を。

１２＊雌豹がやってきた

神に差し出すように掲げられた、澪の載るアイドル雑誌。
せめてそれが澪の載る雑誌である、最悪アイドルという過去さえ死守できればと、竜二はそこに手を伸ばしていた。
しかし、残念ながらそこまでの壁は遠く、そして、高かった。
途中、無理に足を伸ばした反動で足が吊ってしまい、机の角に強打する形で竜二は転倒した。
バタン……と、大きな音を立てて。
しかし、掃除の道具箱に隠れる澪には何が起きたかと分からず、何か大きな物音がしたとしか分からない。
「なっ、何が起きたの！？」
その震動はこちらまで来ていた。
反面、外にいた他の部員達はそれを目撃している。

竜二が――里穂子を押し倒したということを。

「おお、大胆だねえ」
などと茶化す里穂子。その顔は、冗談半ば困惑気味。
竜二は、倒れた流れで里穂子を押し倒してしまったのだ。故意にではない。事故だ。
なので、ワケも分からず、今は里穂子のふかふかの胸板に収まっている。
そんな気まずい状況に火を注ぐように、倒れた反動で落とした澪の載るアイドル雑誌が、もはやここまでくれば、逆にラッキーと言うべきか。
――際どい水着で雌豹のポーズを取る、アイドル川上澪のページが開いていた。
しかも、ページを跨いだ見開きだった。

もう何もかもが終わりだった。

＊

フェイトは性格柄そうなのだろうが、凛は大人だった。
あの状況で一切騒がない。騒ぎかけたのだが、瞬時に騒いではいけない空気を察したのである。おかげで助かった。
今、改めて一息入れようと、皆、席についている。もちろん、澪はいつもの特等席だ。
机の上には、問題のアイドル雑誌がある。見やすいよう、ちょうど真ん中に。
中にはスレスレの写真もあるので、ページは閉じたまま。厳かな空気である。
ここまで来ると、もう里穂子も隠し通すわけにもいかない。
観念したのか、アイドル時代の澪のことを教えてあげた。
が、親友を売るような真似はしたくないので、まずは張本人に了解を得ることに。
澪が隠れる掃除の道具箱に向かう時、竜二は、里穂子の横顔を見た。
真剣だった。初めて見る顔だった。
里穂子は、閉ざされた、錆び付く鉄の扉の前に立った。
「澪、ごめん」
それは。
「どうしたの？」
二人だけの秘密――
「アイドル時代の話、してもいい？」
澪と里穂子だけの、秘密。

１３＊にははは！

里穂子が走っていた。
人混みの多い廊下を、どけどけと威勢のいい声なんかあげて、全力疾走していた。
徐々に目的地が見えてくるのだが、速度はそのまま。
扉を掴んで、強引に曲がった。
入る。教室。１年Ａ組。隣のクラス。
曲がって真っ直ぐ――窓際で一人ぼんやりとグラウンドを眺める女子生徒に突撃する。
夜空を駆ける流星のような、美しい艶のある黒髪。
そこに飛び込むように、里穂子は陰気な女子生徒に近寄った。
バン！　と、威嚇するように机を叩かれ、突然の出来事に驚くその女子生徒。
里穂子は、一冊のアイドル雑誌を叩き付けてきた。
「これ！　澪だよね！？」
初対面。しかも、今まで一度足りと面識のないクラスメートから、いきなり呼び捨て。
隠してたアイドルのことも知ってるし、何者……！？
怪しい人だ。それが澪が里穂子に感じた最初の印象だった。
澪はとりあえず雑誌を机の下に引っ込め、
「そ、そうだよ」
よそよそしい態度で、返事をした。
里穂子は物珍しい生き物を見るような眼差しで、澪を見ていた。
ずっと。しつこく。避けられても。まとわりつく。
あまりに“うざったい”ので、徐々に澪も苛立ってくる。
たまたま手に持っていた雑誌が苛立ちによって丸みを帯び――筒状に変化する。
無言で態度に示しても気付いてもらえず、まだいる。

「何なんだよ！」
澪は里穂子の頭めがけ、雑誌ハリセンを振るった。
しかし、里穂子には見えていた。
雑誌ハリセンの動き。こうくるであろう予測。閃光が如く。
「てい！」
受け止める。白刃取りだ。
止められた！？　澪は真面目に思った。
真面目に思っていたが、やがて何て馬鹿馬鹿しいことに付き合っているのだろうと、そう思うようになり――
そしたら、自然と笑みがこぼれていた。
笑ってんだか、苦しんでだかわからない。
不器用な人間の不器用な笑い方。
でも、里穂子は伝わっていたのだ。
何故なら、自分もまた、笑っていたから。

１４＊バラドルホルモン

夕焼け空を、里穂子は見ていた。
その隣には、澪がいる。
学校へと続く坂道のガードレール沿いを、二人は歩いていた。
疎らながら、同じ目的で足を動かす他の生徒達もいる。
「なーんだ」
期待を裏切れたとばかりに、里穂子は嘆く。
「てっきり、リムジンとかでお迎えなのかと思ってたよ」
澪はぎこちない笑みを浮かべながら、自虐的な発言をする。
「私、そんな迎えがつくほど売れてないから」
そもそも売れてれば迎えがつくのか怪しいが。
「あの雑誌も、パパのおかげで載れただけだし……」
「パパ？」
ついつい普段通りの呼び名で言ってしまった澪。顔を赤らめて必死になって訂正する。
「お、お父さん！」
若干、声がアガっていた。
「いいよー。無理しなくてー」
殺意が湧くほど憎たらしい顔と声だった。このままガードレール下に突き落としてやろうかと。澪は半ば冗談ながらに思う。
「パパは、何というか……コネみたいなのがあるから」
「コネでも、載れれば嬉しいと思うけど？」
「私、アイドルやる気も、あまり……というか、全然なかったから……」
ふーむ、と、意味深に納得する里穂子。
「何か大変そうだねえ」
「大変……、うーん、大変なのかもしれない」
澪には、当然のようにアイドルとしての実感がなかった。

あるとすれば、このままアイドルを続けていいのか、という疑問。
実のところ、澪を迷わすのは、その一点からである。
コネで入ったとはいえ、そこは、プロの現場。
周りとの違いくらい分かる。時に攻撃的なくらいに。
「里穂子は……アイドルの仕事したい？」
「うーん、バラドルだったらやりたいかも。何でやねん！　みたいな」
「？？？」
澪には何一つ伝わらなかった。
「澪は、したくないの？」
「わからない。けど――」
だから、たぶん。そういうことなのだと思う。
「しないより、していたい」
根は既に、アイドルをやっていたいのだ、と。

１５＊逃げる女。逃げられる男。

澪の曖昧な決意など知らず、まちまちだが仕事は入ってくる。
そして、入った仕事は必ず受ける。売れてないから尚更。そこに贔屓目はない。純粋に一人のアイドルとして扱う。
主に撮影がメイン。水着撮影もしばしば。ごく稀に不意の事故が行って、恥ずかしい思いもする。
だけど、テレビに出るよりはマシだ。
地上波ではない地方局のテレビでも視聴者はいる。
与えられたキャラクターになりきるのが、とても辛かった。
そんな自分を見られるのは、もっと辛くて――
だけど。
ファンはいたのだ。

＊

事務所での打ち合わせを終え澪が出てきた。
交差点の角に建てられた三階建ての事務所である。
道行く人々の上では、モノレールが走っている。
人が混み合うその中に澪も入っていく。
最寄りの駅までは徒歩五分。送迎の車を出してやると親には言われたが断った。
澪の親は世間一般的に見れば、羨ましがられる容姿だが、それでも澪からすれば、人には見られたくないらしい。容姿などは関係なく、これといった理由もなく。
だからこうして、一人で事務所に通っている。
今日はボーイッシュな格好をしている。ファッションとしてキャップを被っているが、特に変装はしていない。
するほど知名度はないし、人気もない。現に今も見つかっていな

い。
駅の手前、人が最も混み合うその場所の信号で止まった澪に気付く者はいない。
気付いている様子もないし、キャップを外しても気づかないだろう。
「川上……澪さんですか？」
油断……というと、やや大袈裟ではあるが、澪の不意をつくファンの声が届いた。おどおどとした声だ。
その声の通り、見た目もお世辞でもカッコいいとは言えない。むしろ根暗なオタクと言った印象。目も飾りのように小さい。
あからさまな雰囲気はなく、髪も短く、喋らなければ、スポーツでもやっていそうな清潔感がある。
「えっ、と……は、はい」
初めてのことで緊張する澪。声はうまく出せない。
「ああ、やっぱりだ……！」
青年は少し取り乱し、すいませんと一言述べて、冷静になる。
「僕、澪さんがデビューした時からのファンで……、あのー、よければ」
青年は不意に背中を向けて、
「ここにサインください！」
などと言ってきた。
本人は意を決して言ったつもりなのだろうが、澪はかなり困惑している。
丁重にお断りしようにも、言葉が浮かばない。
「っ……い」
浮かばないので、浮かんだこの言葉を言って逃げた。
「今、書くもの持ってないから！」
人混みを華麗に抜き去っていく澪の姿が、そこにはあった。

１６＊見えざる敵の視線

「はぁ……」

気持ち良く晴れた空。いつもの通学路で溜め息をつく澪の姿があった。

隣には、緩い坂道を共にする里穂子の姿もある。

まだ時間的に余裕のあるため、周りを見ても、あまり生徒達の姿は見れない。

「おいおい、溜め息ばっかじゃ何も分からないぜ。肝心の悩みを話してくれないと」

それもそのはず。この時間は朝練が始まる頃の、早朝も早朝の時間だからだ。

周りを歩く生徒達も大きなバッグを背負っていたり、それらしい格好がほとんどだ。

まとめて見れば、澪も里穂子もかなり浮いて見える。

澪からメールがあったのは、昨晩のこと。

風呂上がりで湯気の立つ里穂子のケータイに、一通のメールが届いていた。

まだ熱が抜けない指で、ケータイのボタンを曇らせながらも、メールを開いてみた。

「悩みがあるから、明日、一緒に学校行こう……」

本文を読み、里穂子は心の中で燃えていた。

「うおおお！！」

感情が表に出る。頭にかけてたタオルがビックリしたように飛び跳ねて、床に落ちる。

現役女子中学生の力を存分に発揮したボタンの早打ちを使い、一秒フラットでメールを返信する。

送られてきたメールの内容に、悩みがあるはずだった澪だが、逆に里穂子が心配になったという。

「朝六時、バス停前に集合！」

＊

そんなわけで、澪から時間を指定してきたと思いきや、実は里穂子が時間を指定したのだった。

こんな朝っぱらに。しかも、指定した本人がさも巻き込まれたような発言をして。

巻き込んだのは、そちらだと言うのに。

「……」

まあ、嬉しいのだから仕方ない。

友達として付き合うようになってから、話すようにはなったが、一定の距離は感じてはいた。

悩み相談なんてまずなかったし――だから、こうやって悩みを相談してくれたのが嬉しいのだ。

「ファンが……できて」

しばらく無言のまま歩いていると、突如、澪が小声で呟いてきた。

「おお、ついにか！？」

だけど、と、澪は言う。

「少し熱狂的というか――恐いんだ」

言葉の裏に、何を想像しているかは――

小刻みに震える親友の肩を見て、容易に分かった。

「……――ストーカーってこと？」

17＊クライベイビーガール

澪はストーカーに付かれていた。
もちろんそれは、澪の見方だ。
相手からすれば、純粋なファンなだけで、別に自分がストーカーだとは思っていない。
そうした行き過ぎた愛情が異常だと気付けないだけ。
ただそれだけのことが、澪をここまで追い詰めていた。
話を聞いた里穂子は、予想より深刻な悩みだった為、一瞬、言葉に迷った。
「警察には？」
ありきたりな言葉しか浮かばない。
「相談しても聞いてもらえない……って、マネージャーさんが言ってた」
警察にもマネージャーにも相手にされない。
「パパには？」
澪は黙り込んだ。
ずっと俯いたままになってしまった。
言ってない、というより、言えない。あるいは、言いたくないのだろう。
父に相談すれば、そうだ。すぐに話は解決するだろう。
だが、そんな父の言動に、言い換えれば、強い愛情に、澪はプレッシャーを感じてしまう。
“余計なこと”をして、父の思いを裏切りたくないのだ。
特殊な環境だからこその悩みと言えよう。
「もう一度、マネージャーさんに話してみようよ」
「記事になった方がおいしくなるからって……」
そこまで聞いて、ようやく分かったことがある。
頼りの術が無くなったから、里穂子に相談してきたのだ。

どれくらい前から、悩んでいたのかは分からない。
ただ、澪は、学校で会う時はいつも、笑っていた。
悩みなんか感じさせないくらい、笑っていたのだ。
我慢していたのだと思う。
「――里穂子……」
我慢していたそれらが、爆発した。
早朝の静かな時間。抱き締められる友達の胸の中で、声を上げて泣いた。
「よしよし、頑張った。もう大丈夫だよ」
最後の頼りなんだ。
「――私が、澪を守ってあげる」

18＊箱の外

澪の知られざるアイドル時代の過去の話を聞いて、竜二は言葉を失った。
凛もフェイトも、重く受け止めている様子だ。
反面、澪と里穂子は明るい。作られた明るさではなさそうだ。
部室の暗い雰囲気を流すように、澪は掃除の道具箱から飛び出てきて言った。
「け、結局、里穂子が付いてからはいなくなったから！」
正面にいた里穂子が、扉で鼻を強打する。
「っだ！」
不意の一撃をもらった里穂子は、そのまま流されるがままに隣の窓に激突。
「！　里穂子！？」
あんなに真剣な話をしてたのに、もうこんなに明るい。
凛は堪らず笑みをこぼし、フェイトも文庫本でそっと口元を隠した。笑っているのだろう。
だが――
竜二だけは笑っていなかった。
見ていられなくなったのか、竜二は何も言わず、部室を出ていってしまった。
呆然とする一同の中でただ一人、里穂子だけは何かを感じているようだった。

＊

竜二は裏庭にいた。
裏庭の焼却炉の前。
赤く錆び付いた鉄の扉を開けたまま、今にも投げ捨てそうなポー

ズで、何かを手に握っていった。
ボイスレコーダーだ。
一番の宝物。捨てるなんて言語道断。有り得ない。
……はずだった。
「っ……」
知らなかったから。そういえば、それまでだ。
だが、竜二は、この手で確かに、澪の声を録ろうとした。
嫌がる彼女を追い回すように。
まるで澪を付けてたストーカーのように。
知らないとはいえ、竜二は最低なことをしたと思い詰めていた。
塞いだ傷をこじ開けるような真似をしていたのだから。
こんなもの、今すぐ捨てたかった。
だけど、捨てたら、それは、ストーカーと同じだと認めることになるから。
竜二は違う。
コソコソ隠れてなんかしない。
プライドの違いだ。
「――あらら、捨てちゃうのかい？」
里穂子の声だ。後ろから聞こえる。
「……澪には黙っておいてって言われたけど、あの時、私は澪のパパさんに伝えたの」
「……」
「言った手前なんだけど、やっぱり私一人で守るには限界があるし、私達だけで解決すべき問題じゃないと思ったから」
「……」
「澪は知らないようだけど、事務所を辞めさせられたことも、ストーカーがいなくなったのも、全てパパさんがやったこと。だから、私は何もしていないんだ」
だけど、と、里穂子は言う。
「そんな私でも、誰かの背中を押すくらいはできる。……ううん、

たぶん、できたと思う」
里穂子は告げた。
「――――」
住所。近くのようだ。
「私ができるのは、ここまで。ここから先は――佐藤君、君にしかできないことだよ」
ありがとうございます。心の中でお礼を言う。
危うく、プライドまで捨てるところでした、と。
「しばらく、部活休みます」
「おっしゃー！！　見せてきたれー！！」
走り出した新入部員を、里穂子は大声で見送った。

１９＊本日、戦闘中

翌日の箱部の部室には、竜二の姿がなかった。
それ以外の部員達はいて、その中で唯一、澪だけが竜二の不在を気にかけていた。
昨日の話を聞いて、気を悪くさせてしまったのでは、と。そう考えてしまうのだ。
掃除の道具箱にすっぽりと嵌ったまま、考え込む。
気にかけているのが知られたくないから、一人で、だ。
するとそこに、意外なことにフェイトが竜二の所在を話題に挙げてきた。
普段は口数の少ない彼女が気にかけるのは珍しいことだ。
「サトーがこない」
「佐藤なら今日は休みよ」
携帯ゲームに熱中しながら、凛は言った。
「学校にも連絡入ってないし、何か家族はちゃんと登校したって言ってたらしいし、どこほっつき歩いてるのかしらね」
「――戦場だよ！」
勢いよく開けた扉の音に勝る声が、そこから届く。
「り、里穂子先輩……！？」
厚着をした里穂子が、そこにはいた。
「戦ってるんだよ。佐藤君は」
その顔は、どこか勇ましく見えた。

＊

五階建てのマンションの、三階。
その一室に、竜二はいた。
竜二とは何の縁もない部屋だ。友達でも親戚でも、まして家族で

もない。
完全に他人の家だ。
そこに竜二がいるのには、ちゃんとした理由がある。
まさか、他人の家に勝手に忍び込んでいるわけがない。それではただの空き巣だ。
関わりがあるのだ。できたと言うべきか。つい数時間前に、仲間となった。
「――いやー、本当に聞いた時はビックリしたよ」
冴えない面をした青年が言う。
「まさか、澪と同じ高校に、それも部活まで一緒なんて」
青年の周りには、様々な機器があった。一つ一つの名称や用途は全く分からない。その手の知識がある者にしか分からないような機器の数々だ。
それでも一つだけ、竜二にも分かるものがあった。
ヘッドホン。そして、何かのダイヤル。
静かなその部屋に流れる音は、ラジオや音楽ではない。
ただの雑音。ノイズ。それも、砂嵐のようなザーザーの雑音ではない。
途切れ途切れの雑音。あのダイヤルで周波数を調整しているのだろう。
竜二が聞かされたのは、それが、隣に住む澪の部屋に繋がっているということ。
「“僕達”は本当に運がいいね」
――盗聴をしているということを。

２０＊愛子の合いの手

すっかり遅くなってしまった。夜の帰路を竜二は走っていた。
遅れの原因として、あの男の場所で長居したのもあるが、自分の体力を過信したのが大きい。
おかげで予想より倍以上、帰宅するのに時間がかかった。
この時間だと、もう愛子も帰ってきているだろう。
生活能力が一般人の平均を遥かに下回る女だ。腹を空かせて待っているに違いない。
玄関の前で深呼吸を一回。覚悟を決めて、ガチャ。扉に手を開けた。
「ただいま」
玄関の明かりがつく。
「竜ぅぅぅ二ぃぃぃ」
同時に陰湿深い金切り声が届いた。
「ぬあああっ！」
化けて出た。完全に心境はそれと同じだった。
顔面にパックをした状態の半裸の姉がいたのだ。
「顔！　肌！」
呂律が回らず、的確にポイントだけをつく。
どうやら風呂上がりだったようだ。バスタオル一枚という開放的な姿でいる。
「とにかく何か着ろ！　湯冷めするだろ！」
「――竜二」
先程の冗談とは打って変わって、真面目に名を呼んだ。
真剣、というより、怒っているというのが伝わる声だった。
「先生から聞いたよ。今日、学校行ってないでしょ」
そっちか、と、心の中で竜二は思った。
「登校中に気分が悪くなって」

「ウソ。だって、お昼に家に帰ってきた時にいなかったもん」
八方塞がりな状況だった。
結局、嘘をついたのは、竜二が学校を欠席したことを、愛子ほどに重く受け止めてないからで。
正直、軽い気持ちでいた。
「どこに行ってたの？」
言いたくない。言えない。複雑な気持ちが竜二を黙らせる。
「言えないならいい。竜二はそういうことをしない子だって知っているから、よほどのことがあったんだと思う」
だけど、と、愛子は言う。
「どんな理由があっても、学校は行かなきゃ駄目。どうしても休みたい理由があるなら、まず、私に相談しなさい」
本当はもっと言いたい気持ちなのだろう。
だが、愛子はそれ以上は何も言わなかった。
「ごめん」
考えを改めよう。竜二は今を通じて感じた。
長期戦を予定していた。だけど、盗聴。事態は予想してた以上に、深刻なものだった。
そして、愛子に言われて、覚悟を括る。
決戦は、明日の放課後。
そこで、仕掛ける。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2471v/

ハコイッ！！

2011年9月27日03時10分発行